
平成 29 年

10 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

新たなブランドづくり

中濃農林■ゆず 「青ゆずこしょう」フード・アクション・ニッポン・アワード入賞！

フード・アクション・ニッポン・アワードは、国産農林産物の消費拡大に寄与する事業者・団体などの優れた取り組みを表彰し、全国へ発信することを目的とした農林水産省主催の表彰制度である。今年度は、9月に審査が行われ、かみのほゆず（株）の「青ゆずこしょう」が見事、応募総数1,111 製品の中から「入賞」100 製品に選ばれた。

「青ゆずこしょう」は、関市上之保産の青ゆずと青こしょうを使用した人気商品であり、今後は、この入賞を機に更なる販売促進が期待される。

農林事務所では引き続き、ゆず加工品の商品開発支援や産地PR活動を通じて、かみのほゆずのブランド化を推進していく。



【青ゆずこしょう】

下呂農林■エゴマ ウォーキング&ジョギングイベントでエゴマをPR

エゴマは、疲労回復等に有効な成分を含んでおり、高地トレーニングと併せることでアスリートへの効果が期待されることから、これまでも下呂市にある「御嶽濁河高地トレーニングセンター」と連携しPRを進めてきた。

10月8日には、「飛騨小坂おんたけパノラマウォーキング&ジョギングイベント」がトレーニングセンターで開催され、農林事務所では飛騨小坂あぶらえ生産組合と協力して、エゴマの機能性についてPRするとともに加工品の試食や販売を行った。

当日は、市内外から100人を超える参加があり、出店ブースでのエゴマの機能性PRへの関心も高く、搾油やドレッシングの販売も好調であった。



【参加者へエゴマをPR】

農業経営課■かき ねおスイート栽培技術研修会の開催

県オリジナルかき新品種「ねおスイート」のブランド化に向け栽培技術研修会を10月17日に開催した。この研修会は農産園芸課及び農業経営課が主催し、今春栽培を開始した生産者、今後栽培したい生産者、関係機関ら約60名が参加した。農業技術センターが品種特性、病害虫の被害等について情報提供を行った。期待の新品種ということもあり、積極的な質問がされた。今後も栽培方法を確立していくため定期的開催して情報交換を行う予定である。



【研修会の様子】

多様な担い手づくり

西濃農林■トマト 試作品種の生育状況を確認～海津トマト部会～

海津トマト部会では、独立ポット耕栽培による新規就農者が増加しており、ポット耕栽培に適した品種として「りんか409」が導入されている。一方、既存の土耕生産者では2品種が栽培され、生産者68名（22ha）で3品種が栽培されている状況である。土耕栽培中心であった産地に、養液栽培の占める割合が増える中、栽培技術面において品種の検討が必要な時期となっている。このような背景を踏まえ、海津トマト部会では平成30年産より「TTM120」を有望品種として、部会内に設置する技術係会が中心となって試作を行っている。

9月26日、技術係会と農林事務所は、定植1ヵ月程度経過した時点での生育状況を確認するため土耕及びポット耕の5ヵ所を巡回し、意見交換をした。現状では、「TTM120」は、草丈がやや伸びるものの、着果や果形及び生育状況は慣行品種と比較して遜色ないとの認識となった。今後もポイントとなる時期の生育状況を技術係会で確認するとともに、農協とも連携して定期的に食味調査も実施する予定である。



【技術係会による現地巡回】

東濃農林■集落営農 **新たな集落営農法人の設立**

10月8日、瑞浪市日吉町において「農事組合法人ふかさわ」の設立総会が開催された。この法人は日吉町内の深沢地区をエリアとし、地区の農家の約7割にあたる31戸が参加した集落営農法人である。

当地区は平成27年度に担い手育成重点推進地域に選定され、3年間、中山間地域等直接支払事業の役員を中心に話し合いを進めてきた。この地域には母体となる任意組織がなく、一からの組織立ち上げであったが、農林事務所をはじめ関係機関で構成する担い手育成推進チームが支援して話し合いを進め、目標とした時期に農事組合法人を設立することができた。

当面は農地中間管理事業を活用して集積した水田約11haで水稻経営を行う予定で、早期に経営が安定するよう関係機関が一体となって今後も支援を行っていく。瑞浪市内には、自己完結型農業主体の担い手不在の地域があるため、この深沢地区の動きが他の地区の集落営農組織化や法人化の推進に波及することを目指して、今後の普及活動を展開していく。



【設立総会の様子】

恵那農林■トマト **若手トマト農家・新規就農者「ほ場巡回交流会」**

東美濃夏秋トマト生産協議会では、10月4日に若手生産者（40歳以下）、新規就農者（就農5年未満）交流研修会を開催した。

当日は、生産者、協議会役員、関係者合計35名が参加し、トマト研修農場を含む就農2～3年目の生産者のほ場4か所を巡回し、各生産者の経営概要や栽培管理状況を確認した。

巡回した各ほ場では、生産者からこれまでの苦勞や今後の経営について説明を受けた後、栽培管理や収量等について質疑応答した。

同協議会では、日頃、地区ごとの研修会活動は行われているが、今回のように他地区の生産者のほ場を視察する機会は少なく、参加者は栽培方法の違いや適正なほ場管理状況を実際に見学し、自身の今後の栽培に刺激を受けていた。

今回の交流会は、農林事務所が新規就農者や研修生を対象に定期的に開催している「夜間ゼミ」の受講生が生産現場で相互交流できる良い機会となり、農林事務所では、今後も新規栽培者の早期経営安定に向け、若手生産者に対する栽培技術支援と「夜間ゼミ」開催による基礎知識習得の支援を継続する。



【ほ場巡回の様子】

売れるブランドづくり

岐阜農林■いちご **パッキングセンター運営検討会実施**

J Aぎふは、10月6日、J Aぎふ黒野流通センターにおいて、パッキングセンターの運営検討会を開催した。農業技術革新工学研究センターから講師を招き、J A関係者と農林事務所が出席した。

検討会では、施設の拡大に伴い、運営の効率化を図ることを目的に、昨年の作業風景のビデオを参考にしながら、主に現状の課題の洗い出しを行った。選別作業での無駄な動きが多い点、作業所の空間を効率的に活用できていない点、パート個々の出来高が把握できていない点などが課題として指摘された。運営検討会は、今後も随時実施する計画であり、農林事務所も運営改善に向けて支援を行っていく予定である。



【運営検討会の様子】

揖斐農林■大野町かき産地と岐阜大学生との交流会 **富有柿倶楽部現地実習**

岐阜大学は、平成28年から「地域ブランドと地域振興」という授業を立ち上げ、地域ブランドの一つとして「富有柿」を取り上げており、農林事務所など大野町柿産地協議会は積極的に協力している。10月18日には、その授業の一環として現地実習を行い、授業を受講している応用生命科学課程の学生10名と留学生12名の合計22名が参加した。



【収穫体験風景】

現地実習では、柿の選果場見学、収穫体験、パウンドケーキづくり、柿加工品の商品開発についての講義の後、柿 5 品種の食べ比べやパウンドケーキの試食をしながら、生産者らと意見交換会を行うなど、学生たちは富有柿を身近に感じながら産地について楽しく学習する機会となった。

今後学生達は、テーマ別にワークショップを実施し、富有柿の振興に関する方策を産地に提言する計画になっており、産地にも刺激となることを期待している。



【参加者一同で記念撮影】

郡上農林 ■ トルコギキョウ 次年度栽培品種検討会を開催

ひるがのフラワーサークル・トルコギキョウ部会では、次年度の栽培品種について検討を進めている。

9月14日、10月6日、10月27日に検討会を開催し、本年度の栽培及び出荷について反省を行い、次年度に向けた対策を踏まえつつ、品種構成について検討を行った。農林事務所からは、本年度実施した新品種比較試験の結果について情報提供した。

本年度も高品質、高単価なトルコギキョウ栽培を実現できたが次年度は新しい品種の栽培も進め、さらに産地ブランド力の向上に取組む事となった。

農林事務所では、品種に合った栽培方法を検討し、さらなるブランド化に向けた支援を継続する。



【品種構成の検討】

可茂農林 ■ 東白川村 大明神集落営農組合 良食味米生産へ向けた取り組み

東白川村の大明神集落営農組合は良食味米生産に向けて、実証ほを設置するなどの取り組みを行っている。

本年度、実証ほでとれた米の品質調査を農林事務所で行ったところ、食味値で平均 86 点 (81~89)、味度値で平均 93 点 (90~98) と高い点数を記録した。

農林事務所では、お米コンクール等での上位入賞を目指す当組合の取り組みを継続して支援していく。

なお、同組合のこれらの取組みについて、10月13日に東海テレビの取材を受けたところである。



【テレビ局の取材の様子】

飛騨農林 ■ 水稻 目指せ！おいしい米づくりの頂点

飛騨地域では、生産者や関係機関が一丸となって美味しい米作りの取り組みを進めており、10月25日には高山市民文化会館において、「第3回飛騨の美味しいお米・食味コンクール（同コンクール実行委員会主催）」が開催された。

飛騨コシヒカリは、日本穀物検定協会の食味ランキングで「特A」評価を平成26年から3年連続で獲得しており、全国規模の食味コンクールでも上位入賞を果たしている。

今年のコンクールには、他地域からの出品も含めて421戸の農家から668点の米が出品され、食味値と味度値の測定結果を基に選ばれた上位15点について、実際にコンクール会場で炊飯したものを16名の審査員が官能評価し、金賞5点と特別優秀賞10点が選出・表彰された。

飛騨地域では、来年度「第20回米・食味分析鑑定コンクール:国際大会 in 飛騨」の開催が予定されており、農林事務所では今後も各地域における研究会等の活動支援を通して、良食味米生産に向けた栽培技術の向上を指導する。



【官能審査をする審査員】